

令和7年度 学校総合評価

6 今年度の重点目標に対する総合評価

今年度、本校では、

- ① 個に応じた学習指導、進路指導のあり方
- ② 学科の専門性の深化、学科間の横断的な学び、生徒の連携・協力の機会の創造
- ③ 社会に貢献し、問題解決能力の高い人物の育成

の3つの学校課題を設定し、別紙（様式5）重点課題に取り組んだ。

(1) 個に応じた学習指導・進路指導

- ・1年生の端末個人購入を機に、授業でのタブレット活用率は約92%に達し、ICTが学習の基盤として定着しつつある。生成AIの活用や課題研究のデジタル化により、生徒の学習意欲は87.4%と高い向上を示している。
- ・進路面では、丁寧な個人面接（満足度90～98%）により、第3学年の就職内定率100%を達成するなど、高い成果を上げた。

(2) 学科の専門性の深化、学科間の横断的な学び、生徒の連携・協力の機会の創造

- ・海洋科学科のウニ養殖や未利用魚の商品開発など、地域課題解決と価値創造を両立させた取り組みが全国的な注目を集めた。
- ・「オータムフェスタ」での4学科合同販売実習は、学科の枠を越えた横断的な協力の場として非常・

(3) 社会に貢献する問題解決能力の高い人物の育成

- ・地域協働学習「未来講座 HIMI 学」の2年間継続研究により、生徒の約92%が問題解決能力の向上を実感している。
- ・生徒主体の校則見直しやスマートフォン使用をめぐる生徒会の主体的な取り組みは、社会規範意識（98%）を育む機会となっている。

※DX加速化推進事業を活用した学科連携の株式会社「HIMIco-bridge」の立ち上げは3つの学校課題すべてに通ずる創造的な一歩となった。

7 次年度へ向けての課題と方策

- (1) 〈課題〉家庭でのデジタルコンテンツ活用における「個人差」の解消が必要である。また、教員間でのICT活用スキルの差や、専門学科におけるデジタル支援ソフトの活用率の低さが課題である。

〈方策〉個別最適化されたデジタル副教材の提供を通じて、自学自習での達成感を味わえるよう工夫をする。教員研修を継続し、生成AIの活用ルールや情報リテラシー教育を徹底することで、質の高い指導を均一に提供できる体制を整える。

- (2) 〈課題〉学科間の連携を学校全体の課題として捉え、単発の行事に留まらない継続的な「新たな価値創造」が必要である。

〈方策〉学科間連携のシンボルとして株式会社「HIMIco-bridge」においてその価値向上を目指して学科間で協力する新たな取り組みを創造し続ける努力が必要である。関係分掌や外部機関との連携を密にし、限られた予算内で教育効果を最大化する運用体制を構築する。

- (3) 〈課題〉HIMI学や課題研究といった探究学習での学びを、各教科の学習（教科学習）へのモチベーションへと往還させることが最大の課題である。学校評議員からはホームページやSNS等を用いて探究成果を発信することが、さらに生徒のモチベーションを向上させるとともに、自己有用感につながるのではないかと指摘をいただいた。

〈方策〉今年度立ち上げた「HIMIco-bridge」の活動を有効に活用し、社会とつながる本物の学びの場とし実践的な問題解決能力と生徒による新たな価値創造を促していく。
公式SNS等の運用組織を整備し、生徒の成果をよりダイレクトに外部へ伝える広報体制を確立する。

不確実な社会の変化に柔軟に対応できる人材を育成するためにも、実践的で多様な学びの場を地域社会と協働しながら、今後も継続的に提供していくことが必要である。

8 学校アクションプラン

令和7年度 氷見高等学校アクションプラン - 1 -

重点項目	学習活動（生徒の主体的な学び）	
重点課題	ICT活用と地域協働学習による主体的な学びの深化	
現 状	<p>(1)ICT活用の推進 Society 5.0時代に必要な能力育成のため、教員への貸与に加え、今年度より1年生は「一人一台端末（タブレット）」を自費購入することとなった。ICTは生徒の関心向上や知識定着に多大な効果があるが、現状は教員がプロジェクタで画面提示を行うスタイルが主流で、生徒自身がタブレットを活用する場面は限定的である。今後は、教員のICTスキル向上を図りつつ、協働学習や家庭学習など、生徒自身が積極的にICTを活用する授業スタイルへの転換を推進する必要がある。</p> <p>(2)地域協働学習について 昨年度より探究学習を「2年間の継続研究」に見直し、課題の検証・分析・再検証を行う時間を確保した。さらに氷見市からの財政支援により、生徒が解決策を実際に「行動」に移せる環境が整っている。知識詰め込み型から脱却し、地域と連携した「本物の学び」を通じて生徒の資質・能力を伸ばすことで、学校の魅力化につなげたい。さらに、HPの充実や発表会への外部招待を積極的に行い、「HIMI学」の取り組みをより多くの人に広めていくことを目指す。</p>	
達成目標	<p>(1)①ICTを学習の基盤として日常的に活用し、主体的に学びに向かう姿勢を育成した生徒の割合・・・80%</p> <p>②ICTを効果的に活用した授業実践や教材研究を継続的に推進した教員の割合・・・80%</p>	<p>(2)①地域協働学習により、教科学習の学びのモチベーションが高まったという生徒の割合・・・80%</p> <p>②地域協働学習に取り組んだことで、自らの問題解決能力の向上に繋がったと感じた生徒の割合・・・80%</p> <p>③HPにおいて探究活動に関する記事の掲載・・・年間20件以上</p> <p>④発表会などに参加する外部の方の人数・・・20人以上（伴走者を除く）</p>
方 策	<p>(1)・教育クラウドサービスを活用した課題提示と個別最適化されたデジタル副教材の提供を通じて、生徒がICTを日常的に使いこなし、授業や家庭学習においても主体的に取り組む習慣を確立する。</p> <p>・年2回実施される互研授業週間におけるICT活用授業の積極的な参観を通して、全教員が一体となって授業改善や教材研究に取り組む。加えて、教員のスキル向上研修を実施し、授業でのICT活用頻度を向上させる。</p> <p>・DX加速化推進事業の活用により、専門学科間の連携を図り、無人販売所の開店に向けた取り組みを行うことで、デジタル活用能力と協働する力を育成する。</p> <p>(2)・伴走者の配置（「未来講座HIMI学Ⅰ」「未来講座HIMI学Ⅱ」） 各グループに課題の内容に応じた外部人材を伴走者として配置する。外部人材延べ20名程度、各年間4回程度の授業参加を予定。</p> <p>・地域の探究実践者と語る（「未来講座HIMI学Ⅰ」） 地域の課題解決に取り組む外部人材を一斉に本校に集め、生徒は興味のある分野についての話を聞き、テーマ設定のヒントとする。今年度は20名程度を招致。</p> <p>・校内発表会の開催（「未来講座HIMI学Ⅰ」「未来講座HIMI学Ⅱ」） ポスターセッション形式や発表形式で実施する。地域の方など外部の方々にも参加していただく。その際、氷見市内外の小中学校に連絡を行い、教員や児童生徒が見学できるような運用を行う。また、「ひみ教育魅力化協議会」に参加しているの方々への周知も行う。よって、本校の魅力を地域の方に周知できることが今年度の目標である。</p>	
達成度	<p>(1)</p> <p>①授業でのタブレットの使用（頻繁・もしくは時々使用）92.2%（R7.1）→86.7%</p> <p>家庭でのタブレット等の使用 86.8%（R7.1）→82.5%</p> <p>ICT活用による学習意欲の高まり 77.7%（R7.1）→87.4%</p> <p>②教員のICTを活用した授業の実施（頻繁もしくは時々実施） 86.8%（R7.1）→87.8%</p>	<p>(2)</p> <p>①地域協働学習により、教科学習の学びのモチベーションが高まったという生徒の割合 HIMI学Ⅰ・・・91.1% HIMI学Ⅱ・・・96.2%</p> <p>②地域協働学習に取り組んだことで、自らの問題解決能力の向上に繋がったと感じた生徒の割合 HIMI学Ⅰ・・・92.9% HIMI学Ⅱ・・・92.3%</p> <p>③HPにおいて探究活動に関する記事の掲載・・・年間15件</p> <p>④発表会などに外部の方々に参加する人数・・・21名（HIMI学Ⅰ・Ⅱ合わせて）</p>
具体的な取り組み状況	<p>本年度より1年生で端末の個人購入が始まり、授業でのICT活用が加速したことで、生徒のタブレット使用頻度は向上し、学習意欲も高まっている。授業において生成AIによる教材作成や課題研究記録のデジタル化を実践する事例があることから、今後は校内研修を通じてこれらの先行事例を共有し、指導体制のさらなる強化を図る方針である。</p> <p>・HIMI学Ⅰ・Ⅱともに、地域の伴走者の方々の熱心な援助を受けながら「自ら課題を見つけ、自ら学び、自ら考え判断し行動することができる生徒」の育成に向けて取り組むことができた。</p> <p>・氷見市教育委員会と協力し、発表会への参加を促すため市内中学校の先生や「ひみ教育魅力化協議会」の委員に向けて、情報を発信した。</p>	
評 価	B	
学校関係者の意見	<p>今後は生成AIの授業での活用方法について、教員研修を進めることが必要である。また、HIMI学で生徒が取り組んだ成果について、外部に効果的に発信していくことやその方法について検討が必要なのではないか。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>教員間のICT活用スキルの差を埋め、全教科で質の高い指導を均一に提供することが求められる。また、生成AI利用における情報リテラシー教育の徹底や、デジタル化に伴う情報セキュリティ対策の強化も行っていく必要がある。</p> <p>探究のサイクルをある程度、できるようになってきたため、今後は教科との往還、そして発表会などにおけるポスターの作成方法やプレゼンテーション能力の向上を目指す取り組みに関しても、機会を設定していく必要がある。</p>	

令和7年度 氷見高等学校アクションプラン - 2 -

重点項目	学校生活（心身ともに健康で充実した高校生活）		
重点課題	「誇りに思える氷見高校」、いじめ撲滅等「安心して過ごせる氷見高校」の構築に向けた、自己指導能力の向上と人権及び健康を大切にする意識の育成		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> さわやかな挨拶を交し合える学校を目指し、さわやかデイを通じた「あいさつ運動」を行うことで、日々の学校生活の中でも、自発的に挨拶を行う生徒が多数見られる。しかし、制服の着こなしや、校内における携帯電話の取り扱いに関して、規範意識の低い生徒も散見される。そこで、生徒会を中心とした生徒が主体となった校則の見直しを進めることで、生徒自身が「誇りに思える氷見高校」を創造し、その過程において自己指導能力を高め、自己有用感を感じられる学校生活を送ることができるようにする。 人間関係における不安や悩みを常に注視し、いじめ撲滅等「安心して過ごせる氷見高校」の創造を目指している。生徒・職員が一体となってより良い学校生活を過ごすことができるように、人権教育を基本とした視点から、良好な人間関係の構築に向けて働きかけていく必要がある。 健康診断結果による治療よりも部活動を優先してしまったり受験時期に治療のタイミングを逃してしまったりするなど、健康管理が疎かになる傾向がある。そのため、自立的な健康管理の意識付けを行う必要があり、特に、歯科検診では、本人が不調を感じていない場合に受診せずに済ませてしまい、治療率が向上しない現状がある。 		
達成目標	① 生徒主体の取り組みによる挨拶・服装・携帯電話の取り扱い等の規範意識の向上	② いじめ撲滅等、「安心して過ごせる氷見高校」に関する意識の向上	③ 様々な健康課題、自然災害の危険性を発見、解決し、健康で安心安全な生活の実現をしようとする意識向上
	生徒意識調査における規範意識率 90%以上	生徒意識調査における学校生活を安心して送れたと感じる生徒の割合 98%以上	生徒意識調査による「健康課題の解決」と「自然災害の危険性発見と対策」に対する意識向上率 60%以上
方 策	<p>① 本校独自の取り組みである年7回の「氷高さわやかデイ」の取り組みにおいて、挨拶の意義を事前指導し、その価値を意識しながら実施する。また、「誇りに思える氷見高校」をキーワードに、生徒会執行部や校風委員及び交通委員が中心となって、校則の見直しをはじめとした、生徒が主体となった取り組みにより、「挨拶の励行」「交通安全（自転車乗車マナー等）」「校内における携帯電話の取り扱いについて」など社会的マナーの意識と自己指導能力の向上を図る。</p> <p>② いじめ撲滅等「安心して過ごせる氷見高校」をキーワードとし、人権教育を基本とした活動を展開する。ホームルームや集会等で、「生命・人権の尊重」を訴えるとともに、学期ごとに「被害調査」によるアンケートを実施する。また、日々の生徒観察で人間関係に関する悩みや問題行動を早期に把握・察知し、得た情報をもとに、迅速かつ周到に対応する「いじめ対策委員会」の体制を構築し、実働する。</p>		③ 生徒保健委員会を通じて、生徒の「健康課題」を探り食事等、個別の「健康課題」の解決に向けて、生徒が主体的に考えるような取り組みを工夫する。また、生徒保健委員会の活動とPTA保健体育委員会の活動が連携できるよう工夫を施す。生徒や保護者への情報発信を通じて、「健康課題」「自然災害対策」を解決する取り組みを促していく。
達成度	① 社会規範の重要性を意識して生活していた生徒の割合 98%	② 安心して過ごせる氷見高校を意識していた生徒の割合 93%	③ 「健康課題の解決」と「自然災害の危険性発見と対策」に対する意識向上率 85%以上
具体的な取り組み状況	<p>① 生徒会執行部や校風委員が中心となり、生徒が主体となった取り組みにより、「挨拶の励行」「校内における携帯電話の取り扱いについて」など、規範意識と自己指導能力の向上に努めた。</p> <p>② 担任による面談や定期的に行う「被害調査」において、問題行動やいじめが疑われる行為について早期に把握察知に努め、都度関係職員間で情報共有を図った。また、クラスや集会で良い行動を示したり、場合によってはSC等と連携したりするなど、チーム対応に努めた。</p>		③ 「健康課題の解決」として、食材の持つ栄養や免疫力について、実際の調理から学んだ。また、被災した氷見市の地震について調べ、世界や日本の災害について比較することで見識を広めた。これらを氷高祭で展示し、来場者に見てもらった。
評 価	① A	② B	③ B
学校関係者の意見	「安心して過ごせる」と答えなかった生徒に対しては、生徒が抱える不安要因について、その背景を注視し、きめ細かな対応をしていくべきである。		
次年度へ向けての課題	<p>① 生徒の意見を肯定的に捉え、生徒が主体的に関わる取り組みや状況を増やすことで自己有用感を高め、今以上に誇りに思える学校や学校生活を創造する。</p> <p>② いじめは誰にでもどこでも起こりえるということを念頭に、些細なことでも生徒から安心して相談できる関係性の構築に努める。また、場合によっては、保護者のみならず、SCや警察等とも連携しながら、生徒の安全を守る。</p>		③ 高校生活を送るためには「健康」であることが大切であり、それは食と強く結びついているため、健康な体づくりを意識した食生活を自覚させたい。また、避けられない自然災害に必要な備蓄について主体的に考えさせたい。

(評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった)

令和7年度 氷見高等学校アクションプラン - 3 -

重点項目	進路支援（生徒の進路実現に向けた進路指導）	
重点課題	個々の生徒に応じた進路指導の取り組み	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 5学科を有する総合制の高校であり、同じ学科の中にも多様な学力や価値観を持つ生徒がいる。個々の生徒の適性と希望に応じた進路を実現するためには、生徒に自分自身を理解させた上、各自に合った進路学習を主体的に進める態度と方策を身につけさせる必要がある。 職業や上級学校についての理解や、入学試験・就職試験などに対する基本的な知識量が不足している。ICT機器の利用には慣れているので、自発的な進路研究等に活用させたい。 生徒自身が進路について継続的に考え、将来や職業について周囲と意見を交わし様々な価値に触れる場や機会を設定する必要がある。失敗を恐れず、高い志を持って主体的に進路実現に挑戦する生徒を育成する体制の強化が重要であり、面接やホームルームの活用が求められる。 3学年は、9月の就職試験から3月の国公立大学後期日程まで7か月にわたる多様な受験を指導・サポートする。5学科それぞれの特性と個々の生徒が培ってきた様々な経験と学力が、進路選択と受験に価値あるものとなるよう、学年、教科、各部署との連携をより密にする必要がある。 面談技術や受験情報の収集・提示方法、保護者との連携など、進路指導のノウハウを蓄積・向上させる体制の充実を図る必要がある。 	
達成目標	① 進路意識の高揚および主体的に進路実現に挑戦する生徒の育成	② 進路関連行事や進路に関する情報提供、個人面接等の充実
	<ul style="list-style-type: none"> 進路関連行事を通して自らの進路決定に向かう意識が向上したと感じる生徒の割合 80%以上 オープンキャンパス等への参加 1学年＝30%以上、2学年＝50%以上 3学年＝75%以上 ICT機器を活用し自発的に進路学習を進めようとした生徒の割合 80%以上 	<ul style="list-style-type: none"> 進路統一ホームルームや大学等見学の満足度 70%以上 デジタルソフト等を活用した進路学習に対する生徒の満足度 80%以上 個人面接等の満足度 80%以上
	③ 進路希望の実現（第3学年 進学希望者）	④ 進路希望の実現（第3学年 就職希望者）
	<ul style="list-style-type: none"> 出願校決定に向けての満足度 80% 	<ul style="list-style-type: none"> 就職希望者の就職内定率 100%
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 社会の一員としての自己を意識させる。他者と協働し多様な価値に触れる中で、自己選択、自己決定し、進路実現に向かうよう環境を整える。 キャリア学習と進路実現の手立てを知る機会を設けるなど、各学年に応じた計画的な進路指導を行う。自らが目指す姿を描き、早期に自己の適性の理解及び将来設計を具体化させ、意欲的に学習ができるように指導する。 生徒がそれぞれの進路目標や学力に応じて、学習の計画や進路学習に取り組めるよう、学習支援ソフトの活用法を研究し、学年で共有する。 進路に関するホームルームを実施し、より効果的な系統指導プログラムを作成して、学校全体での計画的な指導体制の共有化を図る。（進路統一ホームルームを年3回程度実施） 各学年と連携し、3年間を見通した進路指導を行う。 1年次「進路ガイダンス」「職業人から学ぶ」「学問・職業の研究」「文理選択」「卒業生と語る会」他 2年次「大学等見学」「修学旅行（班別研修）」「学部学科の研究」「オープンキャンパス」「インターンシップ」「17歳の挑戦」「企業評価バトル」「卒業生と語る会」他 3年次「進路ガイダンス」「オープンキャンパス」「就職説明会」「企業見学」「進学検討会」他 個々の生徒の実態と進路に関する情報を教員間で共有する。 生徒や保護者向けの進路説明会を実施し、情報提供に努める。 	
達成度	① 1)進路意識が高まったと感じる生徒の割合 1年：90% 2年：96% 3年：91% 2)オープンキャンパスへの参加率 1年：7% 2年：78% 3年：76% 3)進路学習へのICT機器活用の割合 1年：70% 2年：94% 3年：92%	② 1)進路HR・進路行事への満足度 1年：81% 2年：94% 3年：92% 2)デジタル支援ソフトの活用の割合 普通科 1年：84% 2年：79% 3年：79% 専門学科 1年：52% 2年：67% 3年：49% 3)個人面接の満足度 1年：90% 2年：98% 3年：95%
	③ 出願校決定に向けての進路指導への満足度 普通科：93% 専門学科：97%	④ 就職希望者20名 内定率100%（第一希望）
具体的な取り組み状況	<p>キャリアデザインを描き、社会の中で自分をどう活かしていくか、そのために今の自分に何が必要かを考える機会とするため企業評価バトルや大学の出前講義を開催した。進路行事を段階的に配置することで進路意識の高まりを促すことができた。また、生徒一人一人に対し担任による丁寧な面接がなされ、全校体制での指導の取り組みもなされていることが、3年生の出願校決定に向けての指導の満足度や就職希望者内定率の高さにつながっていると思われる。</p>	
評 価	① 1) A 2) B 3) B	② 1) A 2) 普通科 : B 3) A 専門学科 : D
	③ A	④ A
学校関係者の意見	<p>専門学科におけるデジタル学習支援ソフトの活用率が低いことからその理由を分析し、学習ソフトの活用効果や方法について検討を進める必要があるのではないかと。</p>	
次年度へ向けての課題	<p>様々な価値に触れる場や機会となる進路行事をより効果的なものとするため、進路HRを活用し事前指導や事後指導の充実を図る必要がある。デジタル支援ソフトを自発的な進路研究にいかせるよう、情報発信を適切に行う必要がある。高い志をもって進路実現に挑戦できるよう3年間の進路指導を見直し特に低学年での進路指導の充実を図りたい。</p>	

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）

令和7年度 氷見高等学校アクションプラン - 4 -

重点項目	特別活動		
重点課題	学校行事・部活動・及び各主体による地域連携活動のさらなる活性化		
現 状	<ul style="list-style-type: none"> ・学校行事は、全校生徒の参加意識や達成感、協働して生きる力をより高めていくために、生徒の意見を取り入れながら、生徒会執行部を中心に企画・運営を連携して実施する。 ・部活動は、全校生徒の約93%が加入しており、生徒の協調性やチャレンジ精神、創造力の向上に大いに寄与している。休養日週2日制の中、限られた時間を有効活用するために、明確な活動計画と集中した時間活用の工夫が求められる。 ・積極的にボランティア活動に参加しようとする生徒が年々増えている。地域と連携した美化活動の計画やボランティア推進委員会を中心に家庭クラブやJRC部等とも連携し、ボランティア活動に参加する生徒をさらに増やしていきたい。 		
達成目標	① 各学校行事の内容の充実	② 部活動に参加することで協調性やチャレンジ精神、創造力を高める生徒の増加	③ ボランティア活動に参加することで社会に貢献しようとする態度を養う
	各行事に対する生徒の満足度 90%以上	3学年生徒の満足度 85%以上	美化活動、環境保全活動、募金活動等への全校生徒の意欲的参加
方 策	<ul style="list-style-type: none"> ① 各行事の前に各種委員会の開催や事前アンケートを行い、全校生徒の参加意識を高め、生徒が主体的に協働して活動を進められるようにする。また、行事後にアンケートを行うことで、生徒の達成感が高まるよう改善点を加えて次年度に活かすよう工夫する。 ② 部活動を通して、協調性やチャレンジ精神、創造力の向上を図ることの大切さを全校生徒に意識させつつ、目標を明確にし、計画的にメリハリのある取り組みを促す。生徒にアンケートで部活動に対する意識調査を行い、結果を各部顧問に知らせ、前向きになれるよう支援活動に活かす。 ③ ボランティア推進委員会を中心に、ボランティア活動のチラシの配付や放送などを通して、全校生徒に積極的な参加を呼びかけるとともに、ボランティア後の記録や感想を残すなど、振り返りの機会を設けることで、社会問題への関心を高め、社会に貢献しようとする態度を養う。 		
達成度	①各行事に対する生徒の満足度95% 1年93% 2年97% 3年95%	②3学年生徒の部活動に対する満足度89% (加入率90%に対する満足度)	③ボランティア活動への参加率37% 1年42% 2年36% 3年34%
具体的な取組状況	各行事において、生徒の意見を取り入れながら生徒会執行部を中心に企画・運営を連携して実施することができた。体育大会では全校生徒のアンケートをもとに新種目(満水リレー)を考案し、実施した。学校祭では生徒会がステージ発表をネットで配信することで、より多くの生徒が興味・関心をもって行事に参画していた。また、部活動では特別活動部を含め、多彩な部活動を運営できるよう顧問の配置、予算運用等適正に対応した。		
評 価	① A	② B	③ B
学校関係者の意見	eスポーツを通じた高齢者との交流や部活動の一部としてボランティアを行うといった地域貢献につながる活動が考えられるのではないかと。		
次年度へ向けての課題	引き続き、学校行事においては時代の変化に対応しながらルールやマナーの在り方を考え、より多くの生徒が安心・安全に学校行事に取り組める工夫が求められる。また、生徒数減や物価高騰の中で各活動の予算を見直していく必要がある。各行事や部活動など、関係する担当者と連携を密に取り、予算運用を行っていかねばいけない。さらには、状況に応じて他分掌等とも連携を図っていく必要がある。		

(評価基準 A:達成した B:ほぼ達成した C:あまり達成しなかった D:達成しなかった)

令和7年度 氷見高等学校アクションプラン - 5 -

重点項目	その他（情報発信及び家庭との連携）	
重点課題	適切な情報発信及び保護者との情報共有の推進	
現 状	<ul style="list-style-type: none"> 家庭との連携を図るために、PTA活動への積極的な参加を呼びかけている。 PTA定期総会の実施・・・昨年、総会への参加保護者数は、21.7%（1年20.8%、2年26.6%、3年19.1%）とコロナ感染症が減少に移行しても以前の状態には戻っていない現状である。また、学年別PTA研修会においても、3年64.2%（普84.6%、専45.0%）、2年45.7%（普57.7%、専33.6%）、1年36.3%（普42.0%、専30.9%）と参加率は例年に比べて減少している傾向にある。 PTAと生徒の懇談会の開催・・・令和元年度より開催を継続している。昨年度も懇談会を実施し学校生活や部活動に必要な物品などの要望について話し合い、より充実した学校生活を送ることができるよう予算内で優先順位を協議し整備している。 PTA会報「ゆづるは」の発行・・・広報委員により年2回の発行を継続している。体育大会や氷高祭などの学校行事、授業の様子や部活動などの様子を紙面を通じて発信している。 学校と保護者との情報共有手段として、「氷高ほっとメール（安心安全メール）」への登録を保護者に呼びかけており、登録率は高い水準（98.3%）で安定している。 学校の広報活動としてホームページを活用している。学校の紹介や行事等を随時掲載しているが、更新の遅れや内容に不十分な箇所があり見直す必要がある。 	
達成目標	① 総会への参加を促す企画の立案、実現。各行事の情報の発信。 ・定期総会、講演会への参加保護者数140人（25%）以上 ・各学年PTA研修会保護者参加率3年90%、2年、1年70%以上	② 学校行事のホームページへの投稿率100% ・本校では各分掌や学科ごとにホームページ担当者を設けており、リアルタイムに情報を発信できる体制が整っている。 ・本校には学校のPRとなる学校行事や部活動が多くあるが、まだまだホームページに反映されているとは言えない。
方 策	<ul style="list-style-type: none"> 定期総会の講演内容に関して、保護者アンケートをFORMで調査し、保護者の希望に沿った内容の講演を実施することで定期総会に関心を持ってもらう。 各行事の案内や活動報告をHPやメールで発信し、興味・関心を高める。 定期総会後にFORMで保護者アンケートを実施し、集まった意見を次回の定期総会に活かして内容の改善をはかる。 	<ul style="list-style-type: none"> 最新の記事を投稿する体制はできているが、ホームページ全体を統括して管理する分掌が明確でなかった。そこで教務部の「情報管理の総括」でホームページを統括し、すべての学校行事に対して、教務部情報担当から各分掌へ投稿を依頼する。 全職員にホームページを見てもらい意見を集約しやすい環境を作る。 内容によっては「氷高ほっとメール」を活用してホームページの閲覧を促す。
達成度	70%	99%
具体的な取り組み状況	①定期総会で講演会を実施 ・Google Formによる事前調査で保護者の関心事を調査し、ニーズに基づいて講演内容を決定。事後アンケートで「満足」と「おおむね満足」を合わせて98.9%の高評価を得た。 ・総会出席者153名（出席率27.2%） 学年別研修会出席率 3年普:90.3%、3年専:29.8%、2年33.1%、1年55.7% 広報誌（年2回）、学年だより（年4～5回）による行事予定、活動報告	② ・各学年、学科、分掌等の担当者の協力を得て、ほぼすべての行事について、ホームページに載せることができた。 ・閲覧者数については、毎月、昨年と同月を上回り特に6月は7,000人以上増えた。1月末現在で総閲覧者数はすでに昨年の1年分を15,000以上超えている。
評 価	B ・総会および講演会への参加率は、魅力ある講師選定と事前ニーズ調査により目標を上回る成果を得た。 ・学年別研修会は、1・2学年で前年度比の改善が見られるものの、目標（1・2年70%、3年90%以上）には届かなかった。	B ・学校行事100%を目標にしたが、学年や分掌によっては担当者1人に負担がかかり、掲載のタイミングを逃した行事があった。
学校関係者の意見	ホームページは「学校の顔」でもあるので、作成チームを組織するなどして内容を充実させるべきである。	
次年度へ向けての課題	<ul style="list-style-type: none"> ICTツール（Google Form等）を活用した意見集約を定例化し、双方向の情報共有を強化する 各学年研修会の内容を精査し、進路情報など保護者の関心が特に高いテーマに特化する 	<ul style="list-style-type: none"> SNSの活用がまだまだ不十分である。柔軟に発信できるようなシステム作りが必要である。

（評価基準 A：達成した B：ほぼ達成した C：あまり達成しなかった D：達成しなかった）